

氏名（本籍）	高本 真寛（三重県）			
学位の種類	博士（心理学）			
学位記番号	博甲第 6974 号			
学位授与年月	平成 26 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	対人ストレス処理過程に関する検討 —コーピングとサポートの関連を含めて—			
主査	筑波大学教授	文学博士	松井 豊	
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充	
副査	筑波大学准教授	博士（心理学）	湯川 進太郎	
副査	法政大学教授	教育学博士	服部 環	

#### 論文の内容の要旨

（目的） 個人がストレスを経験した際に行使する様々な対処行動（コーピング）に関する研究と、他者との関わりの中で得られるソーシャル・サポートに関する研究は、ともにどのようにして精神的健康の維持と関連するかについて明らかにすることを共通目的としているが、それぞれ独立して検討されてきた。一方で、二つの研究領域の関連についての理論的検討も散見されており、包括的な検討を行うことで、個人がストレスを経験してからストレス反応が生起するまでのプロセスをより詳細に明らかにすることが可能であると考えられた。そこで、本論文は、個人が対人ストレスを経験した際に、個人がどのようなコーピングを行い、精神的健康を維持しているのかについて、ソーシャル・サポートを含めた、より包括的な体系的検討を行うことで、対人ストレスの経験からストレス反応が生起するまでのプロセス、つまり“対人ストレス処理過程”を精緻化することを目的とした。問題史では、これらの問題に関する理論的検討を行った。

（対象と方法） 大学生を対象に、13 の調査を実施した。

（結果） 理論的検討によって導出された問題点について実証的検討を行った。研究 1（研究 1-1:  $N=342$ ; 研究 1-2:  $N=182$ ; 研究 1-3  $N=161$ ）と研究 3（研究 3-1:  $N=218$ ; 研究 3-2:  $N=392$ ; 研究 3-3  $N=328$ ）では、個人が行使したコーピングの意図を明確にした測定が可能となる尺度の開発と妥当性の検討を行った。その結果、開発した尺度が一定程度の妥当性の下で測定することが可能であることが確認された。研究 2（研究 2-1: Time 1  $N=161$ 、 Time 2  $N=154$ ; 研究 2-2:  $N=342$ ）と研究 4（ $N=275$ ）では、対人ストレス・コーピングと精神的健康との関連について検討を行った。その結果、問題解決を志向する積極的行動の行使が主観的幸福感の高さと関連し、問題や他者を回避する回避型行動の行使が精神的不健康の高さと関連することが示された。また、上記の二つのコーピングは、対人ストレスに対する解決認知を媒介することで、精神的不健康と関連することも明らかとなった。

研究 5（研究 5-1:  $N=133$  ペア; 研究 5-2:  $N=283$ ）では、“対人ストレス処理過程”に関する要因の精緻

化について検討した。その結果、コーピングの行使には“受領サポート”が直接的関連をもつことが示された。また、ソーシャル・サポートはコーピングに対して調整効果と直接効果という異なる効果をそれぞれ有することが明らかとなった。続く研究 6 における縦断調査（研究 6-1: Time 1 N=682、 Time 2 N=433、 Time 3 N=392; 研究 6-2: N=62）では、“対人ストレス処理過程”に関する確証的検討とコーピングの個人内プロセスの検討を目的とした。その結果、研究 5-2 で得られた結果を確証する結果が得られた。また、コーピングの個人内プロセスに関する検討では、積極的行動と回避的思考の行使が即時的・短期的間隔において効果的なコーピングであることが明らかとなった。

（考察） 実証的検討の結果をふまえ、本論文において作成されたコーピング尺度の有用性について議論するとともに、“対人ストレス処理過程”のプロセスについて精緻化した。その結果、新たに作成された尺度は、既存尺度と比較して、個人がどのような意図をもってコーピングを行使したのかを、より正確に測定することができるという特徴をもつと結論付けられた。また、“対人ストレス処理過程”に関して、ソーシャル・サポートのうち、知覚されたサポートは調整効果をもち、受領サポートは直接効果をもつことで、それぞれ個別にコーピングと関連することが明らかとされた。すなわち、本論文における検討は、先行研究の知見の精緻化と体系化に寄与する研究と位置付けられた。

#### 審査の結果の要旨

##### （批評）

従来のコーピング研究とソーシャル・サポート研究は、それぞれが精神的健康の維持に至るプロセスの解明を目的に実証的検討が行われてきたが、二つの研究は比較的独立して検討されてきた。本論文は、この問題点をふまえて、二つの研究を包括する検討を行っている。本論文を通して、ソーシャル・サポートとコーピングがどのような関連をもつかが精緻化され、対人ストレスの経験からストレス反応が生起するまでのプロセスモデルを示した点で、すぐれた研究であるといえる。また、実証的検討に際しては、横断調査や縦断調査だけでなく、実施準備に負担のかかる日誌法など多様な調査手法を用いることで、現象に関する多面的なデータ収集が行われており、本論文で得られた知見の頑健性を裏付けるとともに、著者の研究能力の高さを示している。

平成 26 年 1 月 7 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。